北京市Ⅱ

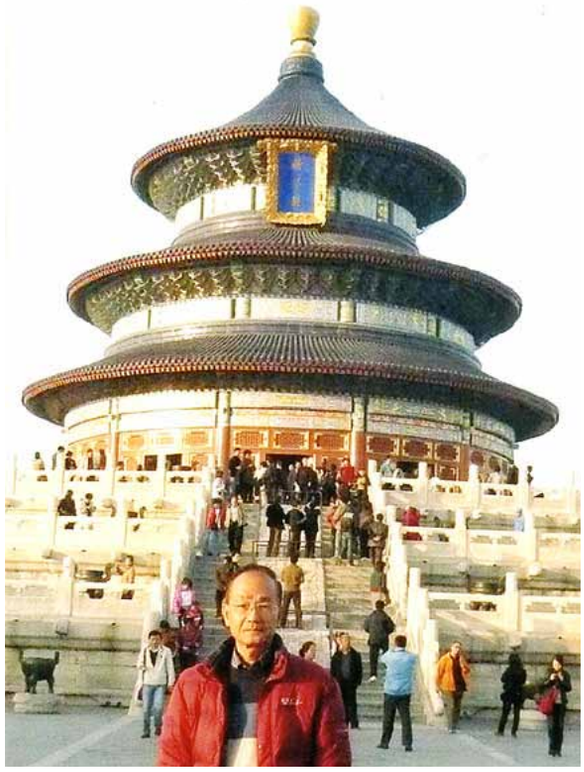
寺西 俊英

二回目の記述が長くなったが、三回目は2008年の11月にお客さんの接待でいっしょに2泊3日の北京旅行をした。

お客さんは北京は初めてなので、まず天安門広場から故宮→頤和園→圓明園→オリンピック施設とまわった。これらはすでに述べているので割愛するが、オリンピック施設は今回は間近で見ることができた。「鳥の巣」スタジアムは、中に入れなかったが、手前の人工池と一緒に撮った写真は私のお気に入りである。「水立方」は中に入ることができた。中はとても綺麗で、北島が百平と二百平で金メダルをとった50mプールと郭晶晶が華麗なる飛び込みで金メダルをとった跳び込み用プールを見ているとあのオリンピックを彷彿とさせてくれた。

さて北京観光といえば万里の長城と明十三陵も定番である。万里の長城は北京では八達嶺に行って見るが、人工衛星からも見えるという長大な建造物なので2年間でここを含め4ヶ所で長城を見た。中でも嘉峪関の長城が一番強い印象を受けた。シルクロードの要路とはいえ周囲が砂漠以外何もないところにあれだけの城壁と長城を作ったことは、中国人の誇りであろう。「天下雄関」と刻まれた石碑を見たが、その字の通りである。ちなみに建築に必要であった膨大なレンガは、「百数十里の遠い所で焼かれたものを牛車で運んだ」と説明書にある。一里は今の一里とは違うであろうが、それにしても気の遠くなる工事であったと想像される。八達嶺は山の背につくりあげられたものであるが、嘉峪関といい、八達嶺といい、あれだけの規模の建造物を作るために、どれだけの人間が狩り出されたのかとの思いが過る。

明十三陵は、八達嶺長城と同じ方向なので帰りに立ち寄った。ここは明(1368 ～ 1644)の第3代の永楽帝から、あの最後の崇禎帝までの13人の皇帝とその皇后の陵墓群であることから十三陵という。そのうち見学できるのは定陵・長陵・昭陵の三陵墓だけである。中でも地下宮殿の定陵が有名で、宮殿は地下27mのところに作ってある。中に入っていくと柱や扉等に手の込んだ彫刻がほどこされており、これだけでも見る価値がある。皇帝の玉座なども展示されているが、あの世でも皇帝として君臨するつもりなのか。縊死した崇禎帝も最後はここに祀られてさぞかし満足しているであろう。



天壇公園内でもっとも有名な建造物・祈念殿。皇帝が正月に五穀豊穣を願い祈りを捧げた。屋根は瑠璃瓦葺きの三層になっている。

二日目はまず天壇公園に向った。この場所はよく知られているように皇帝が天に五穀豊穣を祈願するところであり、明の時代の1420年に造られた。頤和園と同じく1998年に世界遺産に登録されている。祈念殿が特に有名で三層の丸い屋根はデザインが素晴らしい。これを見たときちょうど午前中の太陽の光に瑠璃色の屋根が光り輝き、この世のものとは思えないほどの美しさであった。

午後は胡同(フートン)に行った。場所は紫禁城からすぐのところにある。ここはお客さんと二人で人力車にのって街並みを見学した。「胡同」と中日辞典で引くと「横丁、路地。元代にモンゴル語から入ったことば」とある。モンゴルは遊牧民族なので横丁があるわけはなく、「井戸」という意味から転化したという。元は約100年もの間、中国を席巻していたのだからモンゴル文化はいろいろ入ってきたはずである。馬頭琴もそうなのであろうが、詳しい方の解説を聞いてみたい。

「胡同」は横丁と訳されているが、日本の横丁のイメージとは異なる。細い路地が迷路のように広がっているが、建物は基本的に灰色に近いレンガ造りである。火事

にも強いだろうし、地震も殆どないので昔のままの風情が残っている。ガイドがある家と協定しているのか、中流家庭を見せてくれた。

入口はどこの家も狭いが、中に入ると中庭があり結構広い。いわゆる四合院造りと思える。そこの家主は馴れているらしく、くつろいだ雰囲気でガイドを通していろいろ説明してくれた。彼らの生活の一部が見られ、とても満足した。他の観光スポットも見物したが、三回目はこのあたりで止め、四回目の旅行に移ることにしたい。

四回目の北京行きは、中国人の友人と行った2009年5月下旬である。

天津を皮切りに避暑山荘と外八廟で有名な、歴代皇帝が避暑地とした承徳を堪能したあと北京に一日だけ滞在した。友人とは二人ともまだ行ったことのない周口店に行くことにした。

周口店は言うまでもなく北京原人の頭蓋骨が発掘されこれも世界遺産になったが、 市内から西南に約50kmもあり少し遠い。市内からバスに乗ったが、空調のついた立派なバスでとても快適であった。途中で下車して別のバスに乗りかえ2時間近くかかってようやく到着した。博物館の入口には、大きな頭部のレプリカが置かれていた。そのそばを通り長い坂を登り切ると、そこに博物館が現れた。発見されたのは、50万年前の原人の完全な頭蓋骨であったが、友人が「本物は実はここにない。

実は第二次世界大戦時、日本軍が日本に密かに持ち帰った」と言った。私は当然ここで本物の北京原人が見られるのだと期待していたのだが、このことを知り大いにショックを受けた。これはどう解釈すればいいのかと考えた。友人に日本のどこにあるのかと聞くとそこまでは知らないと言う。盗んだのか、それとも学術的に極めて貴重なものを混乱から避けるために日本に持ち帰ったのか？

友人に「日本が盗んだのか」と聞くと「そうとまでは言えないが、その可能性もある」とはっきりしない。いずれにしても、もし日本のどこかにあるのであれば、中国にすぐ返還すべきである。案内板に発掘された場所が示してあったのでそこに行ってみた。そこには大きな洞窟があり、設けられた階段で下まで下りられるようになっていた。洞窟といっても真暗いトンネル状のものではなく、上からは日が射していた。ガイドブックを改めて見ると「日中戦争の混乱で紛失した」としか書いてない。

北京原人 周口店遺跡博物館入口に飾られている北京原人頭部の巨大なレプリカ

何となくスッキリしない気持のまま、またバスに乗り市内に向った。戻る途中、あの有名な盧溝橋を少し離れたところにかけてある橋から遠望した。ここも是非行きたかったが、時間がなく、そのうちにと思いつつ未だに見ていない。

以上が私の4回に亘る北京旅行の概要である。これだけ書いても、まだ北京のほんの一部分の記述に過ぎない。どうしても見てみたいところは、この盧溝橋、さらに宋慶齢故居・郭沫若故居・恭王府・紅葉の時期の香山公園などであるが、いつか必ずこの目でじっくり見てみたい。これまで書いてきた観光地も季節により、また知れば知るほど違う顔をみせてくれるであろう。従って何度でも見てみたい。やはり北京は奥が深い。